

# 環境配慮型市民農園の利用・運営実態

国立明石工業高等専門学校 5年建築学科

前田美里

## 第一章 序論

### 1.1 研究背景

現在、日本各地で農業従事者でない一般市民を対象とした貸農園が多く存在し、その数は増えてきている。利用規約、運営方法などさまざまであるが、中には有機栽培に加え環境に配慮した取り組みを進めている農園も多く存在している。

農林水産省では、平成15年4月に構造改革特別区域法が施行された。これは、農地の遊休化が深刻な問題となっている地域に、地方公共団体や農業共同組合以外の市民でも市民農園が開設できるという特定農地貸付法などの特例措置である。これにより市民農園は年々増加傾向にある。

### 1.2 研究目的

タイトルに挙げた「環境配慮型」とは廃棄物循環、生物多様性、エネルギー削減の3つに焦点を置いている。まず、廃棄物循環については化学肥料を使用せずに、残さ、その他家庭の生ゴミ、豚や牛などの糞を堆肥として使用したり、支柱やマルチを土に還る素材のものを使用したりすることが例としてあげられる。これにより、ゴミを削減するだけでなく雑草や残さはまた農作物として循環することができる。次に、生物多様性はミツバチ巣箱の設置、里山整備、ビオトープなどがある。他の生物にとってその農園が住みよい環境であるかどうかは重要である。そのため、農薬は使用しないことが原則となり、それに加えて生物の住処を提供できていれば、生物多様性に関して配慮している農園とする。エネルギー削減については農園までの移動手段に車を使用しないことや畑に重機をいれないことなどが挙げられる。

本調査では身近にある市民農園を対象とし、各農園で上記3つの取り組みが行われているかどうか、農園のオーナーが抱えている環境に対する意識やそれに対する利用者の声などをまとめ、環境配慮型市民農園の利用・運営実態を明らかにする。

### 1.3 研究方法

対象地となる農園を探し、実際に出向いてオーナーにヒアリングする。以下の項目を質問する。

- 堆肥にどのようなものを使用しているか
- 農薬を使用しているか
- 現在の区画数と埋まっている数、利用料金
- 利用者の年齢層や交通手段

- 運営方法

さらに、以下の項目はあらかじめ調べた後、実際に畑に入り、確認する。

- 生物保護に関する活動をしている。
- 支柱などの小物類が土にかえる素材であるかどうか

3つの農園を持つA農園については、利用者にアンケートを行った。

## 第二章 市民農園へのヒアリング

### 2.1 調査対象農園の概要

本調査で対象とした市民農園は10件で、いずれも兵庫県神戸市・明石市近辺で市民向けの農園を探し、調査した。都市型の事例を調査するため一部大阪府の農園も含まれている。

### 2.2 ヒアリング結果

ヒアリング項目ごとにそれぞれの結果を以下にまとめる。

#### 1. 農園内の環境に配慮した取り組みについて

結果の概要を表2.3.2-aに示す。

表2.3.2-a 各農園での環境に配慮した取り組み

農園の名前	廃棄物	生物	エネルギー
A 農園岩岡	雑草、馬糞堆肥、小物類	ミツバチ巣箱、無農薬	特になし
A 農園魚住	馬糞堆肥、小物類	無農薬	特になし
A 農園押部谷	馬糞堆肥、小物類	ミツバチ巣箱、無農薬	特になし
B 農園	一部化学肥料	一部農薬	特になし
C 農園	雑草堆肥	無農薬、里山保護	特になし
D 農園	雑草、馬糞堆肥	無農薬	特になし
E 農園	雑草、馬糞堆肥	ビオトープ、無農薬	特になし
F 農園	一部化学肥料	一部農薬	特になし
G 農園	おがくず堆肥	無農薬	駐車場なし
H 農園	雑草、牛糞堆肥	無農薬	駐車場なし

表中の小物類とは、支柱などの畑で使用する小物類が土に還る素材であるかどうかを示す。また、廃棄物循環、生物多様性、エネルギー削減のうち2項目以上達成していると判断した農園は緑色に塗りつぶしてある。

#### 2. 現在の区画数・料金について

区画、料金、充足率に関して表2.3.2-bにまとめた。料金プランがいくつかある農園は、一区画の面積、料金は個別に、充足率に関しては全体を指している

表2.3.2-b 各農園の全区画数、一区画の面積、年会費、充足率

農園の名前	全区画(個)	一区画(㎡)	年会費(円)	充足率(%)
A 農園岩岡	180	25	21,600	86
A 農園魚住	35	25	21,600	86
A 農園押部谷	35	25	24,000	60
B 農園	33	32	20,000	85
C 農園プラン A	300	20	15,000	93
C 農園プラン B		80	50,000	
C 農園プラン C		100	75,000	
D 農園	42	15	63,000	21
E 農園	295	50	12,500	98
F 農園	191	50	30,000	68
G 農園プラン A	33	4	48,000	12
G 農園プラン B		2.16	30,000	
H 農園プラン A	41	18	36,000	60
H 農園プラン B		6	60,000	
H 農園プラン C		6	84,000	

### 2.3 考察

調査をする前に、環境配慮型の農園であることを掲げていれば利用者の関心を引き、通常の市民農園に比べて売り上げが高いのではないかと仮定したが、利用者はおそらく環境配慮型だから選んだのではなく、価格面や距離で大きな問題が無く、かつ有機で野菜が作れるという点で選んでいるのだろう。図2.3.3-a は、環境配慮型である廃棄物循環、生物多様性、エネルギー削減のうち2項目以上当てはまっている農園とその他の農園に分け、1㎡当たり年会費と充足率を比較した図となっている。

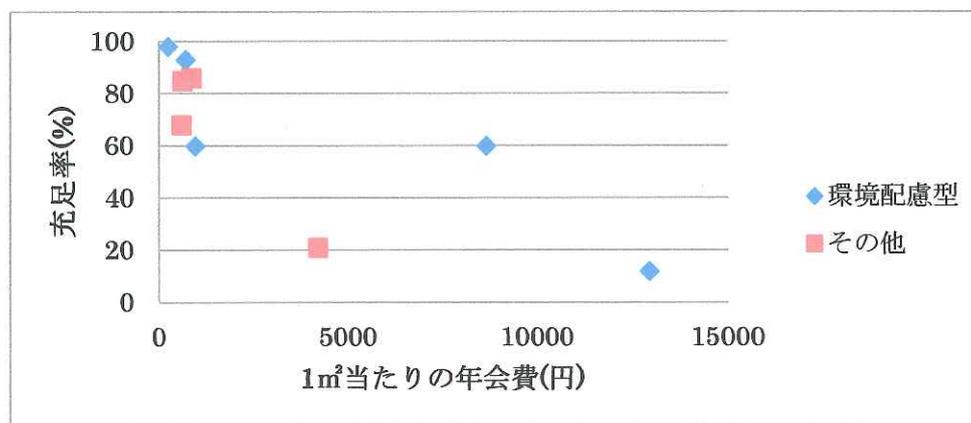


図2.3.3-a 充足率と1㎡当たり年会費の比較

この図を見ると、価格が安い農園に利用者が多いことがわかる。環境配慮型をホームページなどで積極的に掲げ、利用規約にも環境に関する内容を明記しているのは、A農園のみだが、他の農園と比べて目立った充足率の差は見られない。

全体で見ると、現状では、有機栽培を行ない、肥料も購入品ではなく動物の糞や雑草などを使用している市民農園が多かった。有機栽培の点では、環境に配慮されていると言える。さらに、生態系保護の点ではA農園はミツバチの巣箱を設置しており、E農園では環境水路の設置をしている。しかしこれらはどちらもオーナーが率先して行なっており、利用者はあまり関わっていないように感じた。その点では、C農園の里山整備クラブはとても優れている。利用者参加型で活動すれば利用者の中で環境に対する意識が高まるのではないかと思う。楽しみながら環境保全ができるようなプログラムを農園内で積極的に取り入れていくことで利用者に効果が現れるのではないかと考える。次に、車の利用を減らすことについてだが、現状では遠方からの利用者が多い点や農園自体が公共交通機関での利用が不便な場所に位置しているという点で、車での利用者が多い。中には、駐車場を設けていない農園もあるが、近隣に居住する人のみにターゲットがしぼられてしまうため利用者を増やすことは難しい。農園内で駐車場のスペースが取れそうな場所があるなら作るべきなのかもしれない。

### 第三章 A農園利用者アンケート

環境配慮型であることを掲げ、率先してさまざまな取り組みを行なっているA農園について、利用者の声を聞きたいと思い、アンケート用紙を配布し回答してもらった。対象者はA農園岩岡、魚住、押部谷の利用者である。

#### 3.1 アンケート項目について

岩岡では28人、魚住では8人、押部谷では10人の方々にお答えいただいた。

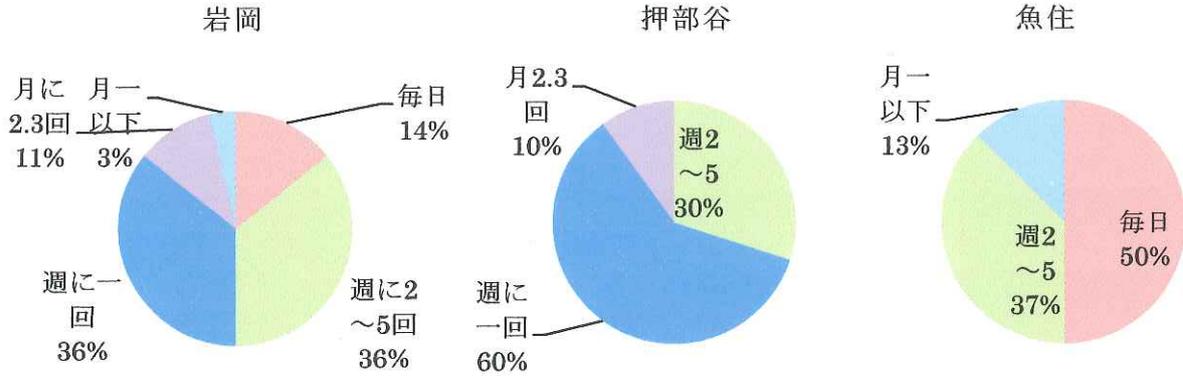
アンケート項目は以下のとおりである。

- 利用者の年齢
- 農園に来る頻度
- 農園に来るまでの移動手段
- 農業経験の有無
- メンバーになった理由
- メンバーになってよかったことと困ったこと

以上の項目の中から、農園に来る頻度と農園に来るまでの移動手段の結果を示す。

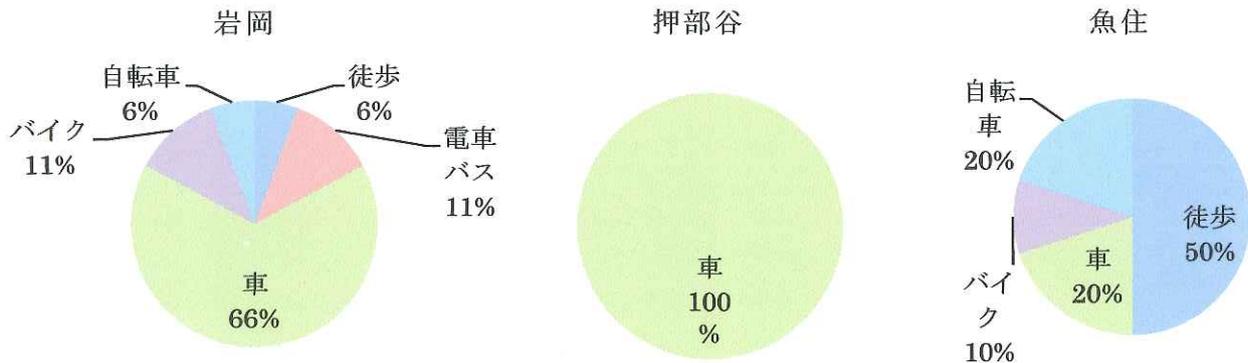
### 3.2 アンケート結果

#### 1. 農園に来る頻度



岩岡や押部谷に比べ、魚住の利用頻度が比較的高い。

#### 2. 農園に来るまでの移動手段



岩岡や押部谷に比べると魚住の利用者は徒歩や自転車の利用率が高い。

### 3.3 考察

定年退職した年齢層は毎日農園に来ることができる人も多いが、普段仕事をしている年代は週に一度程度しか来ることができず、もっと頻繁に通いたいという声も多い。平日でも仕事が終わった時間にすぐ立ち寄れるような場所に農園が位置していればそのような問題が無くなるのだが、通常市民農園がある場所は広い土地の畑であるため、住宅地のそばや中にあるような所は少ない。農園の来る頻度についての結果を見ると、住宅地のそばに位置しているかそうでないかの違いが顕著に表れている。岩岡や押部谷に対して、魚住の利用者は比較的頻繁に農園を訪れていることが分かった。そして、利用者の移動手段の結果から、利用者の多くは農園の近隣に住んでいることが言える。過半数が自転車または徒歩での移動だったためだ。周りに民家が少なく、他の貸農園や田畑が多い地域に立地する押部谷は、

使用中の区画が6割程度であるのに対し、魚住は9割近く埋まっている。利用者アンケート結果から家から近いために選んだという意見も多い。中には、農園の様子を通りかかった際に見て、興味を持ったという人もいた。以上の点から、魚住ガーデンはかなり理想的な立地条件であると言える。比較的住宅地に近い場所に位置していれば、人目につきやすい。

アンケート結果から環境に対して関心を持つ利用者が少ないように思えた。環境配慮型であるということがA農園の大きな特徴と言えるが、この農園を選んだ理由について環境のことに触れている利用者が少なかった。主に有機栽培を行っているということに共感を持ち利用した人が多い。実際に、農園内で使用する支柱などの小物類について枝や竹を使用していない利用者もいる。環境配慮型であるから利用するという人は少ないかもしれないが、利用し始めてから環境に関心を持ってもらうということが必要だと感じた。

#### 第四章 まとめと提案

現在抱えている環境配慮型市民農園の課題について以下に挙げる。

- 環境に配慮した取り組みについて

堆肥や害虫対策については、廃棄物を出さないような工夫が多く農園で実施されていたが、生物多様性の面では、利用者参加型でない農園が多い。エネルギー削減に関しては、車の使用を禁止する農園はなかった。一般に、住宅地や駅に隣接している農園が少ないためである。

- 運営方法について

利用者が増えず、畑の維持のために利益が出ないことが問題となっている農園があった。都市部での農園は固定資産税が多くかかるためにどうしても価格が高くなってしまふ。

農園の運営については大きな問題であると感じた。都市部に農園を開いて車での利用を減らし、利用者も高い頻度で農園に来られることが理想だが、土地の値段のために会費が高く設定され、多少遠くても安い農園を利用している人も増えている。金銭面では都市部での運営はかなり難しいだろう。そのため、運営は地主が運営を他に任せるのではなく地主本人が担当し、市民にとっての趣味の場として農園を提供する形をとることが望ましい。そうすれば利用料金を上乗せする必要がなくなり、地主は固定資産税をまかなえる。また、住宅地の中にある空き地を農園にすれば、環境に配慮しながら地域のコミュニティの場となり、その土地の防犯や草抜きなどの維持・管理もできる。また、本調査で対象とした環境に配慮した取り組みを行っている農園の充足率が7割近くあることや、A農園アンケート結果に少ないながらも環境に関心がある利用者、環境に対して意識が高いオーナーに賛同している利用者がいたことから、今後、より環境配慮型農園が市民のレクリエーションツールとして注目されていくだろう。